

DAB 反応の強いコントラストの故に、抗-LAP-ase で染められた切片中には破骨細胞や肥満細胞が低倍率でも容易に識別された。

演題3. 新しい実験動物スunksの歯科領域における有用性

○藤村 朗, 石井 秀彦, 大滝 洋,
伊藤 一三, 野坂洋一郎

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第一講座

医学分野における実験動物はあくまでもヒトのモデルとして用いられ、特に、用いられる小動物のほとんどは齧歯類である。しかし、歯科領域においては歯牙、歯周組織及び顎関節形態、咬合様式の違いから実験分野が限定されている。系統分類学的に有胎盤哺乳類の源をなす食虫目スunks (Suncus murinus) の実験動物化が近年進められている。今回我々は実験動物中央研究所より、この動物を分与される機会を得たのでその概要と、若干の組織構造を報告し、歯科学的な有用性について考察した。スunksは熱帯から亜熱帯が生息域で低温、水の欠乏に弱く、この点が飼育にあたり注意を要する。今回分与されたスunksは沖縄、長崎、ジャカルタ産のかけあわせより得られた系列 (Sun) のうち、体毛がクリーム色の系列 (CR) である。体長10cm前後、体重40g前後である。口腔領域における所見としては、歯式が $I \frac{3}{1} C \frac{1}{1} P \frac{2}{1} M \frac{3}{3} = 30$ で各歯種を備えている。臼歯歯冠はトリボスフェニック型を示し、上顎第一臼歯は7咬頭、下顎第一臼歯は6咬頭を有する。哺乳類臼歯の基本形態を保持している。歯根はすべて有根歯であり、歯牙の形態、数は齧歯類とは全く異なっている。上下顎の歯牙は嵌合し、又、顎関節の形態 (下顎頭が2個存在)、歯冠形態で talone (taloid) および歯帯の発育から臼磨運動がある程度可能であることが推測される。組織標本からは、歯牙と歯肉の接着要素である上皮付着が齧歯類とは大きく異なって、エナメル質との間に形成されており、ヒトに類似した形態をとっている。さらに、セメント質は根尖において肥厚が見られた。以上のことより、スunksは齧歯類よりは霊長類に類似した形態を有していると考えられ、今後はさらに基礎的なデータが積み上げられることにより、歯科領域の実験動物として有用性を増すものと思われる。

る。

演題4. 下顎小白歯部に両側性に出現した過剰歯の一例

○大滝 洋, 藤村 朗, 伊藤 一三,
野坂洋一郎

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第一講座

今回我々は下顎小白歯部に両側性に過剰歯を有する一例を観察し、過剰歯を含む歯牙の計測及び、歯冠形質を検索して、過剰歯の発生原因などについて先人の報告と比較した結果を報告する。

症例は20歳の男性で、家族歴、既往歴とも特記事項はない。下顎小白歯部には両側性に3本の小白歯が認められ、そのうち右側下顎最後方小白歯は歯列をはずれ舌側に萌出しており、左側下顎最後方小白歯は問診によると、第一大臼歯抜歯後に萌出してきたことが確認された。さらに左側下顎犬歯遠心舌側に歯肉の膨隆が認められ、X線写真により、この部に埋伏歯が存在し、形状は小白歯様歯冠の形態を呈していた。X線写真上には他に埋伏歯の存在は認められなかった。形態的に劣型でやや小さいことから、両側最後方小白歯並びに左側下顎埋伏歯が過剰歯と判定された。右側過剰歯は列外歯であるため抜去され、その全景が観察された。歯牙全体は下顎小白歯様であるが、歯冠外形は咬合面がつぼまり蕾状を呈している。歯髓腔は広く、髓角が明瞭で根管が太いことより、形成時期は第一、第二小白歯よりも遅いと類推された。歯牙計測値並びに歯冠形質の観察から、本症例の歯牙は全体的に優型で、特に厚径が大きく、カラベリー結節、プロトストリッドの出現が認められる等、歯帯の発達の良いことがわかった。

以上のことをまとめてみると、過剰歯は定型歯であり、正常小白歯よりも小さく、歯列の舌側に形成され、形成時期は第一、第二小白歯よりも遅いことがわかった。歯冠形質については、歯帯の発育が良好であった。さらに、右側過剰歯と左側後方過剰歯は形態的に下顎正中矢状面に対して対称的な形状をなしており、鏡映的關係を類推できた。また左側埋伏過剰歯については、X線写真のみの形態比較であるが、左側下顎第一小白歯と左側下顎犬歯正中を軸とした鏡映的關係が類推できそうである。